「間違っていることを間違っていると言うだけでも少しは世の中が変わる」

『三十の反撃』ソン・ウォンピョン著　祥伝社　2021

眞鍋由比

昨年の衝撃は「イカゲーム」だった。Netflixの韓国ドラマ。映画『タクシー運転手』でも感じた韓国人ならではのあふれる人情味と日本のマンガの影響の大きさ。最初のイカゲームに勝ったときの「バンザイ」は日本語。バンザイクリフなどを思い出し、嫌な予感から始まるデスゲーム。あのドラマの一番恐ろしいところは、負ければ殺されるゲームに参加するほうが現実の社会で暮らすよりもマシと思う人がたくさんいるという残酷なリアリティ。それが世界で一番視聴されたということは、弱者を食い物にしている社会が普遍的なものであるということなのか。

うっかり死んだ祖父の遺言で変な名前をつけられそうになって、母の捨て身の抵抗で知恵（キム・ジヘ＝知恵）というその年で一番多い名前を付けられた主人公。ソウルオリンピックの年に生まれた子。平凡で失敗も成功もない30歳。

韓国映画「パラサイト」でもおなじみのソウルの半地下の部屋に住み、大企業の文化センターの非常勤職員。そこの教授が忘れた携帯を届けにいったカフェで、教授にバイト代も払わずに自分の書いたものを盗作したと大声で糾弾する青年ギュオクに会う。彼はやがてもうひとりのインターンとして同じ職場に働くことに…。積極的に雑用も嫌がらずに仕事をこなすギュオクと無料講座（といっても受講料は天引き）のウクレレのレッスンをうけることになる。そこで出会った人たちは身を削ってつくったレシピを盗まれた中年だったり、自分のシナリオを盗用された売れないライターだったり。ギュオクはそういった理不尽な目に合わされて苦しんでいる仲間に「権威に対する服従を打ち破る練習」を提案し、仲間はその気になる。事件にはならない、いたずらのような、ささいな抵抗。「これは悲しむべきことではなく、怒るべきことだった」

失敗も成功もない、といいながら高校時代にジヘは同じ名前の子に陥れられて犯罪者にされていた。大学時代に仲の良かったダヨンは、独立心旺盛でオーストラリアでワーキングホリデーして自分の人生を謳歌するはずだったのに、三豊デパートの崩落事件のせいで結婚し就職を断念せざるを得なくなる。育児に負われている彼女に「ジヘは時間があっていいな。自分のことだけを考える時間」といわれ疎外感を感じるジヘ。

「間違っていることを間違っていると言うだけでも少しは世の中が変わる」と仲間とともに動いたその先は―。被害者だと思っていた自分が、加害者にもなっていた後味の悪さ。

アラレちゃんに似ている主人公、「計画」のときにハム太郎のお面をかぶったジヘ。彼女に共感する人は多いだろう。（ハム太郎は海外でも人気で、タイでは反政府運動で使われたとか）。のどちんこを見せて笑うギュオクも魅力的。主人公は成長するし、さわやかな結末なのだけれど、弱者を放置する現実を変えていくにはどうすればいいのか、考えさせられる。

刑務所を出たら豆腐を食べさせるという風習が面白いと思った。女性のタイプを熊（おっとり）とキツネ（気が利く）に例えるのもよくわからない。